

茶番には付き合っていられません

## Character

### 王妃

王宮の権力を握る。  
ヘレンやアレクセイには  
なぜか激甘。

### 国王

一見ミシェルに  
同情的にも見えるが、  
地味に話が通じない。  
何か秘密があるようで……

### アレクセイ

婚約者である  
ミシェルを差し置いて、  
ヘレンを寵愛する王太子。

### ヘレン

アレクセイと『仲良く』する場面が  
見られる侍女。  
その行動は茶番そのもの。

### ダンテ

バーソロミューの侍従。  
主人に忠実な反面、  
歯に衣着せぬ  
物言いをする。

### バーソロミュー

ミシェルに求婚する  
異国の皇太子。  
計算高い一面もあるが  
ミシェルへの愛は本物。

### ミシェル

本作の主人公。  
元日本人の転生者。  
物語での立ち位置は  
『悪役令嬢』のはずだが……？

### さよなら、非常識二人組

私を取り巻く今の環境は・非常識だと言えるだろう。

ありがちだが私は前世で読んだロマンス小説の世界へと転生した。

これまたありがちな『悪役令嬢』として。

私の名はミシェル・エルリアン。筆頭公爵家の令嬢として生まれ、幼少の頃に王太子アレクセイの婚約者となった。

何も知らなければ人生勝ち組と言って過言ではない。

だが、ミシェル・エルリアンの小説内での立ち位置は『悪役令嬢』だ。

ヒーロー役の王太子とヒロインの恋路を邪魔し、ヒロインを虐める悪女。

ゆくゆくは婚約破棄されてヒロインに婚約者も王妃の座も全て奪われる哀れで惨めな存在。勝ち組どころか負け組確定の存在だ。

「物語は物語の世界だからいいのよ。現実を起こるとこれほど非常識でおかしなものはないわ」  
自分の不幸な運命に思わずため息が漏れる。

物語ではヒロインがヒーローと結ばれることにのみ特化しているから、彼等の邪魔をする者は皆

悪役だ。それは分かる。

だが、ここは現実だ。二人のための世界として存在しているのかもしれないが、ここに生きる人には当たり前だがその人の人生がある。それは私だつてそうだ。

私にとってはヒーローとヒロインこそが悪だ。

ヒーローである王太子は正当な婚約者である私を蔑ろにして、ヒロインばかりを優先する浮気男。そしてヒロインは婚約者のいる男に手出しするような倫理観が欠如した女だ。

婚約者が他所の女を優先することを怒って何が悪い。

そして自分の婚約者とベタベタするような略奪女に苦言を呈して何が悪いというのだ。

それは当然の権利じゃないか。

非常識な浮気男と略奪女が幸せになるために私を排除しようとする行為の方が、世間一般的にはおかしいだろう。

どうしてそれが持て囃されなければならないのか。

もう何人の転生悪役令嬢がそう思ってきたのだろう。きっと星の数ほどいるはずだ。

悪役令嬢だろうが何だろうが婚約者がいる男が他の女と恋をすれば浮気だろう。

様々な障害を乗り越えて二人は結ばれました――

いや、障害つて私かよ！ ふざけてんの？

何できちんとこつちとの関係を清算してから結ばれないの？

別に婚約破棄してから好き放題イチャコラすればいいじゃない!?

悪役令嬢という恋のスパイスが必要とか知らんわ！

王太子だから何でも許されるわけ？

「いや、私は許さないわ。あんな非常識な人間に関わるのはもう無理」

前世を思い出した今、王太子だろうが王様だろうが私は私を蔑ろにする奴を許すつもりはない。

前世を思い出す前の私は許していたが、今の私は決して許さない。

浮気者で非常識な婚約者を許すつもりはない。それにその浮気を許す周囲も許せない。

「婚約破棄するわ。これ以上我慢を強いられるのはまっぴらごめんよ！」

婚約破棄した令嬢の行く末は修道院か年老いた男の後妻というのが相場だろう。

だがそれが何だと言うのか。浮気者の亭主に耐え続ける女房になるよりよっぽどマシだ。それに年老いたといってもこの平均寿命が短い世界では、お相手はせいぜい四十から五十代。それなら全然ストライクゾーンだ。イける！

私は意気揚々と馬車に乗り込み、浮気野郎の王太子に婚約破棄をつきつけるために王宮へと向かうのだった。

今日は婚約者の交流の日である。

婚約者である王太子と楽しくもないお茶を飲むために午前中いっぱいかけて身支度をし、苦痛の時間を過ごして陽が沈む頃に家に帰る日だ。

何という無駄な時間か。そんなことをするくらいなら丸一日家でプチプチ潰ししていた方がよほ

ど有意義というもの。この世界にプチプチないけど。

しかも婚約者同士の交流とうたっているくせに毎回部外者がいる。

その部外者こそ物語のヒロインであるヘレンだ。

ヘレンはふわふわの金髪に董色の瞳の儂げな美少女だ。

対してミシェルは黒い髪に青い瞳の、美人だがキツめの顔立ち。

ヒロインが可愛い系で悪役令嬢が綺麗系というのは、もはや様式美だなと思う。

脱線してしまったが、何で婚約者同士の茶会に部外者が混ざっているかというところ、王太子が許しているからだ。

いや、そんなに私とお茶会したくないならスッポかすか中止にするかしたらいいじゃん？

何で毎回わざわざ嫌がらせのように別の女連れてくんの？

いつも思うのだがヒーローは悪役令嬢に何してもいいと思ってるのかな？

それだとそっちが悪役になっちゃうけどいいの？

心の中で文句を垂れていると乗っていた馬車が止まる。きつと王宮に着いたのだろう。

王宮の侍従に案内され、王太子のいる場所に向かう。

向かった先にはいつものように、まるで恋人同士のように仲睦まじい様子の男女が座っていた。

物語のヒーローである王太子とヒロインのヘレンの二人が。

侍従が気まずそうに私を見る。彼はきつと常識的な人間なのだろう。

婚約者にこんな堂々と蔑ろにされている私を氣遣ってくれるのだから。

いつもなら何も気にしませんといった澄ました顔で茶会の席に着く。

そして語らう恋人達を横目に一人静かにお茶を飲むという苦行の時間を過ごす。

私が正当な婚約者なのに何故、毎回こんな気を遣わなければならないのか。

本物のミシェル・エルリアンならば今日もそうしていただろう。

彼女は社交界一の淑女と謳われているレディなのだから。

だが、つい先日前世を思い出した今の私は違う。前世でアラフォーの社畜だった私は黙ってれば喰われるのが世の常だということを知っている。

もう我慢は今日限りで終わりだ。政略なぞ知ったことか。

そう決意した私は改めて目の前のバカップルに向かって淑女の礼をとった。

「ご機嫌麗しゅうございます。王太子殿下」

私の声に反応し、ヘレンとの時間を邪魔するなどとばかりに睨みつけてくる王太子。

こいつは何が気に食わないんだか知らないけど、いつもミシェルを目の敵にする。

一度でいいからそのムカツク顔を引っぱたいてやりたい。

そんな陰険な空気を読めないヘレンが満面の笑みをこちらに向けてきた。

「ミシェル様！ お待ちしておりましたわ！」

『なんでアンタが待ってるのよ!?』そう言いたい気持ちで飲み込んで、私はまるで友達みたいに話しかけてきたヘレンに顔を向ける。

「まあヘレン嬢、相変わらず殿下と仲睦まじいご様子ですね。まるで貴女が婚約者のようすわ。



ねえ、殿下？」

私の直接的な物言いに、殿下もヘレンも面白いくらいに顔を強張らせた。  
今までのミシエルだったらこんなこと言わなかったものね。

「ミシエル……貴様！ ヘレンを侮辱するのか!!」  
鼻息を荒くして憤慨する王太子。

ハッ！ 青臭いガキンチョに睨まれたって怖くもなんともないわよ！

「あら？ どうして侮辱になりますの？ だってこれは婚約者同士の交流茶会でしょう？ 殿下に寄り添うヘレン嬢の方が、わたくしよりもよほど婚約者のようだと申し上げただけですよ？ それのどの辺が侮辱に値しますの？」

息継ぎなしで畳みかけるように喋る私に圧倒された様子の王太子。

何よこれくらいで驚いたの？ そんな煽り耐性低くてアンタ今後、国王としてやってけるの？

「も、申し訳ございませんミシエル様……。私がここにいるせいで……」

「本当ですわね」

「え？」

「何!？」

こんな直球で返されるとは思ってたなかったのだろう。

ヘレンも王太子も目が点になっている。

「初めから不思議だったのです。どうして婚約者同士の交流にヘレン嬢が同席しているのか。今更

ですけど教えてくださいますか、殿下？ どうしてお茶会に毎回ヘレン嬢がいますの？」

「……私が招待したからだ」

んなことたあ知ってるわ！ 私が聞きたいのはどうして連れてきたかだよ！

「何故ですか？」

「は？」

「ですから、何故ヘレン嬢を招待しますの？ 婚約者は一応、公式的にはわたくしです。わたくしと茶会をするのが普通であり、常識ではありませんか？ ヘレン嬢と交流したいのなら、その前でも後でもお好きになさればよろしいのです。わざわざヘレン嬢を伴う理由がわたくしにはさっぱりこれっぽっちも分かりません。……それとも、わざと、わたくしが嫌な気持ちになるようになさったのですか？」

うわ、あきらかに図星って顔に書いてあるわ！

この王太子、こんなに顔に感情が出て大丈夫なの？

「そ、それは……」

え？ 嘘？ そこで詰まっちゃう？

やあね、これじゃ私がアンタを虐めているみたいじゃないの（笑）。

「申し訳ございません！ すぐに出ていきます……」

青褪めた顔でヘレンが席を立つ。

だけど今更遅いわよ。

「あら出て行かなくてもよろしいわ。もうわたくしはこれでお暇いたしますし、もう二度とここにはまいませんから」

「えっ!？」

「なんだとっ!？」

アンタ達リアクションが一緒（笑）！

ほんつとお似合いの二人だわ、もうこいつらが婚約しちゃえばいいのよ！

「正直、うんざりですの。わたくしは王家から打診があったから婚約者になっただけだというのに、殿下はわたくしをチャバネゴキブリを見るかのように嫌な顔をされてばかり！ そんなにお嫌でしたら婚約なんて解消すればよろしいのよ！ それで晴れてヘレン嬢をお迎えになればよろしいわ！」

「え？ チャバ……何？」

「そんな……いけませんミシエル様!!」

おいおいどこを気にしてんのよ王太子は？

今気にするところ、ソコじゃないでしょう？

それとヘレン、アンタに私を止める権利ないからね？

「父の公爵にはわたくしから話しておきますからご安心を！ それでは御機嫌よう！」

言いたいことだけ言って私はその場を去った。

それはもう風のごとくダッシュだ。ハイヒールでだって関係ない。

前世では電車に間に合わない時はよく走ったからね。

チラリと後ろを振り向くと嘖然とした様子のバカップルが見えた。  
それを見て私は思う。  
ハッ、いい気味だ！と。

### ミシエルの両親

今日は婚約者同士の交流茶会だというのにすぐに帰ってきた私はそのまま部屋に引きこもった。  
あんな屑に会うためだけに何時間も馬車に揺られて疲れてしまったからだ。

ベッドでのんびりゴロゴロしていると、扉をノックする音と共に両親の声が聞こえた。

「ミシエル？ 今日で殿下との茶会じゃなかったのか？」

「いつも夕方頃に帰ってくるのに今日はどうしてこんなに早いのか？ 殿下と何かあったのか？」

え？ 何かあったって……。まさか両親はあの屑の所業を知らないのか？

あー……。でも確かにミシエルの記憶の中では、誰かにこのことを話している様子はない。

「殿下とは婚約破棄したのですわ！ なので、もう王宮には行きません！ あの殿下、毎回毎回別の女を婚約者同士の交流茶会の席に座らせるんですよ！ あんな屑と夫婦になるくらいなら死んでやりますわ！」

ミシエルは親に心配かけたくなかったんだろうけど、悪いが私は心配かけまくるから！

だってミシエル一人が我慢すればいいなんて私は嫌だもの！

あんな屑と婚約を決めたのは親なんだから責任とってもらわないと！

「はああああ!! 別の女？ なんだそれということだ!!」

「なんですってええええ!? あの王子、貴女の前で堂々と浮気していたっていうの!? しかも毎回? 何て恥知らずなの!!」

「おや? 両親は怒ってくれるのか。」

もし『お前が我慢しなさい』系の親だったら家出してやるところだった。

なんだ! ミシエルの両親イイ人じゃん!

部屋の扉を開け、両親の中に入ってもらい今までミシエルが王子にされた所業を全て話す。

毎回顔を合わせるたびに嫌そうな顔で舌打ちされること。

何かにつけて私を貶し、ヘレンを褒めること。

茶会に毎回ヘレンを伴い、しかも私を完全無視して二人の世界に入ること。

贈り物も手紙も一切送ってこないこと。

何だコイツ本当にひどいな。モラハラ浮気男じゃん、最低だわ。

「私の娘を馬鹿にしおって……………!! 許せん…………今すぐ王城に行って婚約破棄の書類を叩きつけてくる!!」

「わたくしの可愛いミシエルがそんな目にあっていたなんて…………! 気づかなくてごめんね、ミシエル…………!!」

目に涙を溜める両親を私は『いや、なんでほんと気が付かないの?』と冷めた心で見ていた。だって贈り物や手紙なんかは同じ屋敷に住んでいるんだから絶対気づくじゃない?

それともこれって謎のご都合主義展開にありがちな都合よく親が気づかなくてやつかな…………? 「わたくしもう辛いし嫌なの! もう王宮にも行かないし王妃教育だって受けないわ! 殿下と夫婦になつて子供を作るなんて無理よ、無理! 考えただけで悍ましいわ!!」

「勿論だ! もう行かなくていいから家でゆっくりしていなさい!!」

よっしや——!

これであのムカツク王子にも嫌味姑の王妃にも会わなくて済む——!!

さあて明日から家で何しよう?

好きなことが好きな時間にできるって最高に贅沢だわ——!!

## 難航する婚約破棄

王家に婚約破棄を告げにいったお父様だが、どうやら難航しているらしい。

「嘘か本当か知らないが陛下は王太子殿下の所業を全く知らなかったそうだ」

「え？ 王宮であんなに堂々とヘレン嬢とイチャついていたのに？ 知らないって逆に国王としてまづくないですか、それ？」

国王は何でも知っているべきじゃない？

一国の君主がそれで大丈夫なの？

それともこれも『物語あるある、王様が王太子の所業を知らない』というやつかしら？

「……以前から思っていたのだが陛下はどうも視野が狭い。ミシエルの言う通り国王がそれでは駄目だな。国王たるもの知らなかつたで済まされるはずもない」

「そうですわ。それに知らなかったから何だと言うのです？ わたくし達の可愛い娘を蔑ろにしたのは紛れもなく国王の息子の王太子です。親であれば責任をとって、とつと婚約解消すればよろしいのよ！」

憤慨するお母様。ミシエルのために怒ってくれるんだ。イイ母だわ。

「渋っているのは持参金がパアになるからだろうよ。ミシエルが嫁げば王家派十億ゴールドの持参

金が入るからな。金のない王家にとつては痛手だな」

十億ゴールド!? 国の予算の何倍にもなるじゃない！ そんなのボンと持参金で持たせるお父様すっごいわ……!!

「ふーん……。なら、同額とはいかないまでも、それ相応の持参金が出せる家の令嬢が嫁げば問題ありませんね？」

まあお母様悪いお顔！ 美人だとそんな顔も毒々しくて素敵すてきよ！ 悪役の女幹部って感じ！

「おいおい妻よ、何を考えているんだ？」

「いいえ？ わたくしはとつとあの阿呆あほうな王家と縁を切りたいだけですわ！ あの阿呆な王太子に別の令嬢を宛てがってやれば陛下だって満足するでしょう？ 我が家は違いますけど王妃になりたい令嬢なんて山ほどいますからね！ さあ、そうと決まればさっそく社交に出ますよミシエル！」

お母様の目的は分らないが、中々エネルギーギッシュな女性だということは分かる。

こういう女性、嫌いじゃないわ。

お母様の言う通り、私は翌日から社交に精を出した。

お母様は貴族夫人相手に、私は未婚の令嬢相手に今回のことを悲壮感たっぷりに語った。

『努力はしたのだけど、どうしても殿下が別の女性を傍で大切にしているのは辛くて耐えられなかった。でもきつと、理解のある令嬢ならばきつと殿下をお支えできるのでしょうね……』と。

同情する者もいれば嫌味を言ってくる者も勿論いた。後者には私もお母様も挑発するように言い

返し、相手をその気にさせた。

その気になったご令嬢は素早い行動力で早速、王太子との謁見（という名のお見合い）を取り付けていた。流石肉食女子の行動力は凄まじい。

まだ婚約破棄は成立していない状態での見合いだが、我が家も私も文句を言うつもりはない。むしろ応援する。それに名目上は謁見だ、謁見に文句をつけたりはしない。

お母様曰く、王家の威信はそれほど高くもないので割と誰でも王太子と見合いが出来るとのこと。今までそれがなかったのは、単に筆頭公爵家の令嬢である私という婚約者がいたからだそうだ。

「これで王家がさつさと婚約を破棄してくれるといいのですが……」

「そこは何としても破棄してやるわよ。まだ婚約が解消されてない段階で、我が家が殿下に他のご令嬢を勧めた意味を国王なら理解するでしょう」

なるほど。お母様が言いたいのには『娘の代わりに嫁になってくれそうな女を紹介してやったぞ。これで満足してろよ、いいな?』ということかしら。

婚約者が別の女を紹介する時点で相手に愛想が尽きていると宣言しているようなものだものね。

社交界で私とお母様が暗躍し、別の令嬢を王太子に宛てがったのだが事態は思わぬ方向に進んだ。

「王太子殿下が複数の有力貴族の家から抗議を受けたそうよ」

「何がどうなってそうなるのですか!？」

複数の有力貴族に喧嘩売るって正気なの？

非常識だし自己中心的な奴だけど、公の場では王太子としてきちんと振る舞っていたと思っただけ……？

「それがねえ……、わたくし達が焚きつけた令嬢が謁見という名目で王太子と見合いをしたらしいのよ。まあ、一応貴女とは婚約破棄していないわけだし、二人きりというわけにもいかないから表向きには令嬢の父親か母親が付き添って行つたの。勿論挨拶だけして『後は若いお二人で』と席を外すおつもりだったでしょうよ。なのに……いたのよ、その王太子の隣に件の女が」

「えっ!? ヘレンがいたんですか?」

あの馬鹿! ミシエルの前以外ではヘレンを同席するなんて阿呆なことしなかったのに!? 他の令嬢相手にもそんな愚かな真似をするなんて……とうとう頭がおかしくなったわけ!?

「そうそう、そのヘレンとかいう女ね、それがいたのよ。しかも自分の隣に座らせて……」

「うわ………それ絶対に相手の令嬢もその親も怒りますよね?」

「当然、怒ったそうよ。しかも令嬢はヘレンをそれはもう口汚く罵つたらしく、それに激高した王太子殿下が令嬢の頬を平手で打つたみたいよ。しかも何人もの令嬢に同じ対応をしたのだとか」

「うわぁ………呆れるほどの屑……」

いくら大好きなヘレンを侮辱されたからって、女に手を出す男なんて屑よ屑!

あんなのと夫婦になつていたかもと考えただけで悍ましいわ!

「そこからはもう想像に難くないでしょう? 貴族にとつて娘の顔はとても大切なもの、それを傷

つけられるのは面子<sup>メンツ</sup>を傷つけられるも同然。しかもそれが得体の知れない女を守るためだから余計に火に油を注ぐわよね。もう王家の求心力は下がる一方よ。殿下は『暴力王子』と言われてもう誰も婚約したがる令嬢はいない状況よ」

「……逆効果になっちゃいましたね……」

「いいえ？　そうでもないわよ。この件を逆手にとって『暴力王子に娘をやるか！』と旦那様が陛下に抗議したから。流石の陛下も事態を重く見て婚約破棄を進めているらしいわ。……ところで、貴女はあの馬鹿殿下から暴力は受けていないわよね？」

うわ、お母様、怖っ!!　これ、暴力を受けたと言ったら王太子を物理的に殺しに行くような顔だわ！

えーっと、ミシエルの記憶を辿<sup>たど</sup>って……うん、大丈夫、暴力は受けていないわね。

「はい、わたくしは一度もそのような暴力を受けておりません。そういえばわたくしはヘレンを悪く言ったことはないですからね」

ミシエルは健気<sup>けんげ</sup>にも『殿下の大切な方だから……』とヘレンを悪<sup>あく</sup>し様に罵<sup>のの</sup>ったりはしなかった。

ミシエル……良い子だよアンタ。

「まあ……！　よく我慢したわね。わたくしだったら扇子<sup>せんす</sup>でその女の顔を張り倒してやったわよ？」  
あらやだお母様ったら綺麗な顔して過激。でもそういう過激な女、嫌いじゃない。

「ところで……そのヘレンとかいう女って一体何者なのかしら？　いくら調べても元子爵の遺児だ  
としか出てこないのよ……。元つてことは今は平民でしょう？　平民がどうして王宮で王太子殿下

の隣にいられるの……？」

お母様は心底不思議そうな表情で首を傾<sup>か</sup>げている。

普通の貴族の感覚で言えば確かにお母様は正しい。平民が王太子の近くに侍<sup>はべ</sup>るなど有り得ないからだ。専属の侍女も侍従も、身元のしっかりした貴族の子息令嬢が就くのが当然。王宮では平民は下女や下男しか職がない。たとえそれが元貴族であってもだ。

「ヘレンは王妃様の友人である子爵夫人の忘れ形見だそうですよ。親を亡くした幼いヘレンを哀れに思った王妃様が自分の侍女として傍に置き、そこから王太子殿下と交流を深めていったようですわ」

「まあ……一見すると慈悲深い行為ね。いかにもあのお花畑王妃がやりそうなことだわ。王宮の侍女、しかも王妃付きになるために世のご婦人達がどれほど研鑽<sup>けんざん</sup>を積んでいると思っているのかしら？　何の功績もない娘、しかも貴族ですらない娘を自分付きの侍女に？　呆れるわ……」

お母様が言うように、あの王妃は自分の理想ばかりを追いつめて相手にも自分の価値観を押し付ける悪癖がある。そのせいでミシエルも何度嫌な目にあったことか……

「ええ、本当に。下手に手元に置くのではなくて、どこかの貴族に養子として預ければよかったんですよ。それをしなかったために平民の身分で王宮侍女、しかも王妃付きなんていう特例中の特例の身になってしまった。それがどれだけ他の使用人達から反感を買うことか……分からないんでしょうね」

実際、ヘレンは王宮で虐めを受けていた。その状況を見過ごせなかったミシエルはヘレンに『こ

こではなく、別の職場を紹介するわよ』と親切にも助言していたのに、彼女はそれを断った。王妃と王太子の傍を離れたくないって。

おまけに阿呆な王太子はヘレンへの虐めをミシエルが指示してやらせていた、なんて濡れ衣を着せて怒鳴りつけて……。ああ、思い出しただけであのムカツク顔を張り倒してやりたくなったわ！「まあいいわ、もう当家には関わりのないことだもの。さっさと婚約を解消して次の相手を見つけましょうか。今度はまともで常識のある素敵な殿方を選びましょうね！」

「婚約を解消したわたくしにいい縁談などくるでしょうか……？　どこかの後妻にならなくてよいのですか？」

「まあ！　筆頭公爵家と縁を結びたい家なんていくらでもあるのよ！　後妻だなんてとんでもないわ！　それに貴女はとびきりの美人なんですよ、いくらでもお相手が見つかるわよ！」

そうなのか。婚約解消したら後妻もしくは修道院ではないんだ。

それにしてもミシエルはまだ十七歳なのにこんなに婚活を頑張らなきゃいけないなんて異世界は過酷だわ……

私がこの歳の頃にはまだ彼氏もいなかったのに、もう婚活をしなきゃいけないだなんて大変なんだなあ。

せめて次はまともで穏やかな男性と巡り合えますように……

今更何よ

「お嬢様……王太子殿下より手紙が届いております……」

嫌そうな顔で手紙を持ってきた我が家の侍女キャシー。

キャシーは王宮でミシエルが王太子に冷たくあしらわれているところを何度も見てきたから、王太子を蛇蝎<sup>だぐ</sup>の如く嫌っている。キャシー、主人想いのイイ子……！

「まあ……今まで手紙一つ寄こしたことなくせに今更何かしら？」

反省文でも書いたのかしら、と手紙を開封し中を読む。

「お嬢様、馬鹿殿下……いえ、王太子殿下は今更なんと？」

「キャシーったら本音が漏れているわよ。ええと……要約すると『許してやるから戻ってこい』だそうよ」

「殺しましょう、お嬢様。ソイツはこの世から駆逐すべき存在です」

キャシーったら過激！　でもそういう過激な女（以下略）。

にしてもこの男は素直に謝ることもできないのか？　謝ったら死ぬ体質ってやつか？

手紙には『ヘレンは俺の一番大切で守るべき女性だ』だの『お前さえ大人しく婚約者に戻れば全て丸く収まる』だの『ヘレンは泣いているんだぞ。お前は何とも思わないのか？』だの戯言<sup>ざれごと</sup>がびつ

しりと書いてあつて謝罪も反省も一つも書かれていない。

「面白いから屋敷中に回覧した後王宮に返しませうか」

「ナイスアイデアですお嬢様！ これで益々エルリアン公爵家内で馬鹿殿下に対する反逆精神が高まりますね！」

「そうよ、そして共通の敵を置くことで皆の絆が深まるものよ」

「ええ、それはもう。使用人の間では休憩時間に馬鹿殿下への悪口ばかり言つて盛り上がつておりますからね！」

「ふふ、キャシーったら不敬になるから外で言つちや駄目よ？」

「ご安心を。最近では他所の家の使用人も、こぞつて馬鹿殿下の悪口で持ち切りですから！」

あらやだ。王太子ったらあちこちに敵作りすぎじゃない？

王家大丈夫かしら？

\*

王太子からのムカツク手紙を屋敷中で回覧し、全員見終わった辺りで国王宛にそっくりそのまま返した。すると今度は本人が直接我が家にやつてきたのだ。

「お嬢様、馬鹿殿下が先触れなしでやつて来ています！」

「まあ……馬鹿は猪突猛進で困つちやうわね。追ひ返してちょうだい」

優しいミシエルならばきつと『せつかく殿下が足を運んでくれたのだから会わなくちゃ』と言つて会うのだろう。だが優しくない私は否だ。会えばイラつくだけなのに会うわけがない。

というか、アイツがこの家に來たのは婚約して初めてだな？ 婚約者のご機嫌伺いも出来ない馬鹿とかほんと嫌い！

「お嬢様、馬鹿がお嬢様に会うまでここを動かないつて門の前で居座つちやいました……」

「まあ、馬鹿は周囲に迷惑ばかりかけて本当にどうしようもないわね」

「王族だから門番が困つていまして……。このままだと根負けして中に入れてしまいそうですう」

「ふむ……なら、門番にこう伝えてくれる？」

キャシーに頼んだ伝言の内容はこうだ。

『王太子を中に入れないようにすれば一人につき金貨五枚を贈呈』と。

やんごとない相手に断り続けるのは精神的にキツイもの。ならばそれに見合つた対価を渡せば彼等は喜んで引き受けてくれるはず。

「お嬢様！ 先ほどの内容を門番に伝えたところ、喜んで承諾してくれました！！ 命に代えてもここは通さないと張り切つていましたよ。流石はお嬢様です！」

やはり金の力は凄い。世の中やつぱりお金だわ。

金貨一枚だけでも門番の一月に値するからね。それが一日で五枚、つまりは給料五か月分が手に入るわけだからそれは張り切つちやうわね。

門番が張り切つて止めてくれたおかげで王太子を邸内に入れるのは阻止できた。

キャシーの話によれば金貨で目の色が変わった門番の『死んでもここは通さぬ』という弁慶も真つ青な氣迫に驚いてすぐに帰ったそうだ。根性ないな。

「また来られても迷惑だから、一応『もう来んな』という内容の手紙を送っておきましょうか」  
婚約は絶対に解消するし謝罪も絶対に受け取らない。

ミシエルが味わつてきた苦渋はこんなものじゃないのだから。

私だから分かる。優しいミシエルはあの王太子を愛していた。愛していたからこそヘレンの存在が許せなくて、でも王太子に嫌われたくなくて何も言えないでいた。

でもミシエル、アイツは既に貴女を嫌っていたよ。それも『親が勝手に決めた婚約者だから』というくつだらない理由で！

当時からヘレンを愛していた王太子は政略で決められた相手の貴女に憤りを全てぶつけていた。ミシエルは何も悪くないのに。

そんなにヘレンがいいなら身分を捨てて一緒になればいいのにそれもしない。王太子という身分は捨てたくないし、ヘレンも失いたくない。なんて我儘で身勝手なのかしら。

あの身勝手で自己中心で身分以外何も取り柄のない空っぽ男が、優しいミシエルを傷つけたことが許せない。

貴女が受けた苦しみ全てを倍にしてアイツに返してやるわ。

王太子の強襲があつてから数日、婚約は未だ破棄されない。

そんなある日、また別の客人がエルリアン公爵家にやつてきた。

「お嬢様、ヘレンと名乗る女性が先触れなしで来ております……」

「え？ ヘレンが？ どうやってここまで来たのかしら……？」

「王家の紋章が入った馬車で来ておりました……。ですが馬鹿殿下はいないようです」

ふーん……。王妃様辺りがヘレンに馬車を貸したのかしら？

いくらヘレンでも勝手に王宮の馬車は使えないものね。

「いいわ、会いましょう。応接室にお通しして」

「え……会うんですかお嬢様？」

「ええ、彼女とはちよつと話したいこともあるしね」

いつも王太子がいるせいでミシエルはヘレンとまともに話したことがない。

これを機会に少し話してみてもいいと思う。彼女が私と同じ転生者で悪役令嬢を貶めようとする性悪ヒロインなのかを見極めたい。もしそうだったらこちらも彼女を全力で叩き潰さねばならないから。

\*

応接室に通されたヘレンは私の姿を見て慌てて頭を下げる。

「あの……突然お邪魔して申し訳ございません……」

おずおずと萎縮した様子で話すヘレンはこうして見るとただの怯えた女の子という風情だ。とて

も悪役令嬢を陥れようとしている性悪ヒロインには見えない。

「本当にね。それで、何の御用かしら？」

冷たく言い放つと、ヘレンはショックを受けたような顔を見せる。

何よ、まさか私が優しく歓迎してくれるとも思ったの？

「あ、あの……ミシエル様、どうかアレクと会って話をしてくれませんか？」

「アレク？ それはどなたかしら？」

「え？ あ、あの、王太子殿下のことですけど……」

「ああ、そういえばそうだったわね。殿下は本名をアレクセイ様とおっしゃるのよね。わたくしは殿下を名前で呼ぶ許可をいただいていないから、一瞬どなたのことだか分からなかったわ？」

言外に『お前は名前で、しかも愛称で呼ぶことを許されているが私は違うんだよ』という嫌味を込めたけど伝わったかな？

お、顔が青いね？ 伝わったようで何よりだわ。

「あの……ごめんなさい！ 私がアレク……王太子殿下の傍にいたせいでミシエル様を傷つけてしまっ……」

「あら？ そんなの今更じゃない？ わたくしが婚約者になった当時から殿下と貴女は共にいたものね。わたくしがいる前でもそれはもうはしたないほどベタベタと」

「そ……それは……」

何が『それは』よ。そのせいでミシエルは深く傷ついたのよ？ ミシエルは貴女を許すでしょ

うが、私は貴女を決して許さないわ！

「今更殿下と話すことなど何もないわ。元々あの方はわたくしを嫌っておいでだし、わたくしが話そうとするたびに睨みつけて怒鳴りつけるもの。それとも……貴女はわざわざわたくしに殿下から睨まれて怒鳴られるとおっしゃるの？ ひどい方ね……」

私は冷たい目でヘレンを睨みつけた。

ミシエルほどの美人が睨むと凄みがあるわよね。今までそんな眼を向けられたことなどないでしょうから尚更ね。

あらあら綺麗な華色の瞳に涙が滲<sup>にじ</sup>んでいるわよ？ 可哀想<sup>かわいそう</sup>……ふふ。

「アレクも反省しているんです！ だからミシエル様にそんなひどいことはしません！ だからお願いです、アレクの話を聞いてあげてくださいい！」

また呼び方が『アレク』に戻っているわよ？

さっきは私に遠慮して『王太子殿下』と言っていたのにねえ……

「え？ 無理。嫌。絶対に嫌」

ハンツ！ 前世で何度もしつこい営業セールスを断ってきた私を舐<sup>な</sup>めるんじゃないわよ！ こういうのは少しでも譲歩の姿勢を見せたら終わりなのよ。だから一歩も退かないわ！ 営業スキルも学んでいない小娘が私を言いくるめるなんざ無理寄りの無理よ!!

「そんな……ミシエル様は、アレクのことを愛してないんですか？」

「ないわよ。むしろ嫌いだわ。チャバネゴキブリよりも嫌い」

「え、チャ、チャバ……？ そんな……だってミシェル様はあんなにアレクに尽くしていたのに……」

「仮にわたくしが殿下を愛していたとして、それを分かっていたながらあなた方はわたくしの目の前でベタベタしていたんですね？ ……性格の悪い。まるで悪魔の所業だわ」

「い、いえつ、違います！ そんな……そんなつもりは……」

「どんなつもりでも結構よ。結果だけ見れば貴女は『婚約者がいる殿方に、その婚約者の目の前でひつつくふしだらな女』、殿下は『婚約者の目の前で堂々と他の女性を侍らす浮気者』です。誰がどう見たってそう言わ。それにやったことは変えられない。加えて殿下は会ったたびにわたくしを罵倒し、蔑ろにし、怒鳴りつけた。そんな男に誰が会いたいと思うの？ まともな神経の女ならもう近づきたくないと思うのが当然じゃない？」

「それは……」

顔色が悪いわね。今更王太子と自分のやった所業を自覚したの？

「わたくしとの婚約を解消すれば、殿下は晴れて堂々と貴女を傍に置けるのだからもつと喜ばしいじゃない？ 愛し合っているんでしょう、あなた方？」

「え、いや、私とアレクはそんなじゃ……」

え？ 違うの？

恋人でもないくせにあんなベタベタくっついていたの？ 気持ち悪っ！

それに貴女はそれでも王太子は貴女に好意があるの丸分りだよ。

「あらそうなの？ でももうそんなの関係ないわ。世間はあなた方を恋人だと認識しているわよ。

今まではわたくしの前でしか貴女を横に置かなかった殿下が、とうとう他のご令嬢の前でもそうしたんですもの。既に貴女と殿下の仲は社交界では周知の事実ですよ？」

「あ、あれは……アレクが私に女性の友達を作ろうとして……、でも女性が私に『下賤な身で王太子殿下に侍るなど不敬な』とか『薄汚い野良猫』とか言うからアレクが怒っちゃって……」

え!? ヘレンに友達を作ろうとしたの？ 何のために？

王太子目当てで来た女に自分の恋人を会わせてどうなるか分からなかったの？

阿呆にもほどがあるわ、あの王太子……

それと他の令嬢の目から見てもヘレンの存在は異常なんだ。

王太子が当然のような態度でいたから常識がバグりつつあったけど、やっぱり私じゃなくてこいつらがおかしかったんだ。それが分かって安心した。

「はあ、そうでしたか。まあそのせいで殿下の評価は今や地に落ちましたからね。女性に暴力を振るうなど紳士の風上にもおけません。前々から思っていたのですが、殿下は貴女以外の女性を粗雑に扱います。貴女以外の女性はどう扱ってもいいと勘違いしておられます」

「あ……あ、アレクは……その……」

「事実でしょう？ ……大方ヘレン嬢は殿下の世間への評価を何とかしたくて我が家を訪ねてきたのでしょけど、わたくしはどうともする気はありません。粛々とご自分の評価を受け入れあそばせ、と殿下にお伝えくださいな」

「で、でもっ！ アレクはミシエル様に会いたいと悩んでいて……！」

「知りませんよ、そんなの。殿下が選んだのは貴女なのですから、これから殿下をお支えするのは貴女の役目です。わたくしではありません」

ヘレンはどうとう大きな瞳から涙を溢れさせてポロポロ泣き出した。

第三者から見れば私がか弱い少女を泣かせた悪者でしょうね。悪いのはこっちなのに。

「……もうお帰りください。これ以上話すこともないですし、殿下も貴女を心配するでしょう」

「でも……でもっ、私……もうどうしたらいいか……」

「さあ？ それは殿下に相談したらいいんじゃないですかね？ わたくしと違って貴女なら殿下もお優しく親身になって聞いてくださるでしょうし……。それに、貴女は一度わたくしが差し伸べた手をとらなかつたじゃない？ ……今更、何なのよ」

いやそこで何で『ショックを受けた』みたいな顔するの？

事実でしょう？ ミシエルが別の職場を紹介すると言ったのに、アンタそれ断つたじゃないの！ それとも私が何とかしてくれるとでも思ったのかしら？

まあ、図々しい。ヒロインだからって何でも助けてもらえろと思つたら大間違いよ！

「……はあ……。もう本当にお帰りになって。キャシー、お客様がお帰りよ。お見送りしてあげて」

扉の外ですつと控えていたキャシーが意気揚々と出てきて、ほぼ力づくでヘレンを馬車まで連行した。

その様子はまるで憲兵に連行されていく犯罪者のようだった。

ヘレンを馬車に押し込み、御者に王宮まで連れて行くよう指示し終わったキャシーが憤慨しながら戻ってきた。

「ほんつと腹立ちますねあの女！ 人前なのにみつともなくポロポロ泣いちゃつて、これではまるでお嬢様が悪者ではないですか！ 図々しくも屋敷にやつてきてお嬢様に『アレクを助けて！』と無理強いしてきたのは自分なのに！」

あんな可憐な美少女を泣かせても悪いのはあちらだと断言してくれるキャシーが心強い。

いい侍女を持つて私は幸せ者だわ。

「ところでお嬢様、あの女に聞きたいことは聞けたのですか？ 『でも』だの『そんなつもりじゃない』だの『アレクが』とかしか言っていないませんでしたよ、あの女」

あら、聞き耳を立てていたのねキャシー。

私を心配しての行為だから許すけども。

「ええ、勿論。聞きたいことというよりも知りたいことと言った方が正しいわね」

「知りたいことですか？ それは何でしょうか？」

「ヘレンに野心があつたかどうかを知りたかつたのよ。王妃の座を狙う上昇志向の強い女なのか、そうでないのかを」

「野心ですか？ うー……ん、なんだかそんな感じには見えなかつたですね？ ただの流され易い女のように見受けられました」

キャシーの言うことは当たっている。ヘレンはただ流され易いだけの普通の少女なのだろう。てつきり転生者で悪役令嬢を絶対に陥れる系ヒロインかと思ったのだが、そうではなかった。彼女は物語の設定通りの純粋で清らかで真っ直ぐな王道ヒロインなのだ。

ただその性根はあくまで物語の中でこそ輝くもの。婚約者のいる男性に寄り添う女の性格が純粋だろうが性悪だろうが、現実世界での評価は変わらない。

お相手のいる男性に擦り寄るふしだらで恥知らずな女、それがヘレンに対する世間の評価だ。

「愛されヒロインというのも可哀想なものね」

キャシーに聞こえないようボソッとそう呟いた。

ヘレンが愛されヒロイン特有の純粋で天真爛漫な性格と儂げな美貌を持たなければ。

平凡でどこにでもいる女性だったのなら、氣立てのよい男性と結婚して幸せに穏やかに暮らしていたのかもしれない。

だが、今のままだと王太子と公爵令嬢の婚約を台無しにした悪女としてろくな扱いは受けないだろう。物語では紆余曲折の果てに王太子と結ばれて未来の王妃になったが、現実はそう甘くない。仮にそうなったとしても、筆頭公爵家を敵に回した女を誰が支持するといえるのか。

「他の男キャラクターもろくな性格してないものねえ……」

「ん？ お嬢様何かおっしゃいましたか？」

「いいえ、何でもないわ」

物語にはヒロインに恋する男が王太子以外にも存在していた。

だが、最終的にくつつくのは王太子なので、他は所謂当て馬ボジションだ。

確か王太子の側近で幼馴染の公爵令息と、隣国の皇太子がそうだったはず。

「まあ、私には関係ないか……。キャシー、疲れたからお茶とお菓子を用意してちょうだい」

「畏まりましたお嬢様！ 泥棒猫の相手をしてお疲れのお嬢様に甘いロイヤルミルクティーと果物たっぷりパウンドケーキをご用意しますね！」

「素敵よ、キャシー！ よろしくね！」

ヘレンがこの先王太子とくつつくことが、当て馬男達とどうなるかが私には関係ない。勝手によろしくやっていたらいいんだわ！ 幸せになれるかは知らないけどね。

迷惑な客人がまた来た

未だ婚約破棄を了承してくれない国王にモヤモヤしていたある日のこと。

「お嬢様……、まゝた先触れなしで客人が見えました……」

「また？ 今度はいったい誰なの？」

いつもお父様もお母様も不在の時に限って先触れなしで客がくる。

両親のスケジュールが外部に漏れているのかしら？

「それが……イアン公爵家のカール様です……」

「カール……？ ああ、王太子殿下の側近ね……」

カール・イアンは王太子の幼馴染で側近の公爵家嫡男だ。

そしてヘレンに恋する当て馬ポジションでもある。

「どいつもこいつも先触れなしで筆頭公爵家に訪ねてくるなんて何様かしら？ 話すことなんか

いから追い出してちょうだい！」

「畏まりました、お嬢様！ とつとと追い出します！」

意気揚々と向かっていったキャシーを見送り、私はカール・イアンに対する記憶を辿った。

「ふむ……カールは物語ではお調子者のキザ男だけど、現実でもそう変わらないわね。私と王太子

のお茶会に乱入したり、主人である王太子に人前で馴れ馴れしく接したり……」

ヘレン目線であれば『ああ、王太子と仲がいいんだな』で済むが、ミシエル目線では『無礼で礼儀を知らない男』ではない。

王太子とヒロインのお茶会に割って入っていくシーンも、物語には書かれていなかったがそこにミシエルも同席していたのだ。そもそもそのお茶会は王太子とミシエル二人の交流のためのものだった。つまりカール・イアンは主人とその婚約者と同じ席に着いたことになる。

この世界の常識として、側近が主人とその婚約者と同席し、あまつさえ共にお茶を飲むなんて真似は許されない。

不敬だと罰せられてもおかしくない。

それにカール・イアンは公爵令息といえども、公爵家の中でも末端の家系。何代か前に王女が降嫁しただけの何の功績もあげていない発言力の弱い家の子息。王族と筆頭公爵家の令嬢と同席するなんて無礼にもほどがある。それはヘレンにも言えることだが。

おまけに、カール・イアンはヘレンに恋慕の情を抱いていた。

私としては側近が主人の愛する人に横恋慕することもあり得ないと思う。主人に対して忠誠心があればそんな畏れ多いことは出来ない。カール・イアンが王太子に何の忠誠も抱いていない証だろう。

「可哀想な王太子……あなたの周囲には何の役にも立たない人間しかいないのね」  
忠誠心がないうえに好きな人に横恋慕するカール。

身分も後ろ盾もない、何の力ももたないヘレン。

彼の手元に残ったのは使えない人間ばかり。一番の切り札である資産も身分も教養も人望も全てを兼ね備えていたミシェルを自らの行いで失ったのだから。

しばらく感傷的な気分には浸っていると、屋敷の門の方から騒がしい声が聞こえてきた。

「いいから！ ミシェル嬢に会わせろっ！ 私は彼女と話があるんだ！」

うるさっ！ え、この声はカール・イアンよね？

私に話があるって、私はアンタと話したいことなんか何もないわよ！

いったい何事だと思おう私に門から戻ってきたであろうキャシーが駆け寄る。

「お嬢様、騒がしくて申し訳ございません！」

「それはいいけど、カール・イアンは何を騒いでいるの？」

「先触れなしの無礼な輩にお嬢様は会うつもりはない、と申しましたところいきなり激昂いたしました。全く、短気でもなくでもねえ奴ですね！ 流石は馬鹿殿下の側近です。今は家令のセバスさんが対応しています」

類は友を呼ぶってやつね。短気で無礼な王太子のもとには同族が集まるんだわ。

「セバスが対応しているなら大丈夫そうね。それにしてもカール・イアンとはろくに話したこともないけど、今更わたくしに何の話があるのかしら……？」

「あ、ならコッソリ会話を聞いてみますか？ 玄関近くの小部屋なら門の前の会話も聞こえますよ？」

気になった私はキャシーの提案に乗ることにした。

玄関近くにある小部屋は普段は物置として使われているらしく、所狭しと箱が積んであった。

「お嬢様、この箱は頑丈ですからよければこちらにお座りください。そしてこの隙間から外が覗けますから」

キャシーに言われた壁の隙間を覗くと、そこから門の前で押し問答を繰り返す家令のセバスとカール・イアンの姿が見えた。

「――何度も申し上げますが、当家の大切なお嬢様をお約束のないお客様と会わせるわけにはまいりません」

「なんだと!? 私は王太子殿下の側近だぞ！」

セバスの痺れるようなバリトンボイスと、カール・イアンの小者臭くて甲高い声が聞こえる。

「貴方様が王太子殿下の側近であろうとも、当家には何の関係もないことです。むしろ、た・か・が・側近風情が未来の妃候補を先触れなしで訪ねるなど無礼では？」

「たかがだど!? 私はイアン公爵家の後継者だ！」

「それが何か？ 公爵家の中でも末端に位置する家系が筆頭公爵家に対して不敬ですよ。イアン公子様は貴族の序列を理解されていないのですか？」

ひゅー！ セバス、ナイス毒舌！ 心の中でエール送っちゃう!!

「なっ、なっ……無礼なっ!!」

「ですから無礼なのはそちらだと申しております。当家からイアン公爵家に抗議文を送られたくな

ければさつさとお帰りください」

「送りたいければ送ればいいじゃないか！ そんな脅しに屈しないからな！」

「脅しではないのですがね。いいからさつさとお帰りください。それとも足が震えて馬車に乗れませんか？ でしたらお手伝いしてさしあげますが……」

セバスが目配せすると屈強な騎士が数名そこにやってきた。

彼等のいかにも猛者もさですという気迫にカール・イアンは面白いくらいに震えあがった。

「ま、まて！ 待ってください！ ミシェル嬢が殿下の婚約者に戻ってくれないと、殿下は廃嫡はいちやくされてしまう！ そうしたらもう私はヘレンと会えなくなるんだ！」

え？ どういう意味？

王太子が廃嫡になるのは予想していたから分かるけど、ヘレンに会えなくなるってどういうこと？

「私がヘレンに会えるのは王宮でだけなんだ！ 殿下が廃嫡されればもう側近は必要なくなるから私は王宮に行けなくなってしまう！ そうしたらもうヘレンと会えない！」

いや、知らないよそんなこと！ お前がヘレンと会えないから何だっていうのよ!!

「はあ、当家にもお嬢様にも全く関係のない話ですね。ですが、そういうことでしたら何故イアン公子は王太子殿下を諫めいさめなかつたのですか？ 側近の貴方が殿下に一言『婚約者の前で別の女性を侍らせてはいけません』と申し上げればよかつたでしょうに。そうすれば貴方は王太子殿下の側近のままでいられたのでは？」

ド正論。まさにド正論だわセバス。

この坊ちゃん、自分では何もしくないせに今になって騒ぐとか馬鹿なのかしら。

いや、初対面から馬鹿だと思っただけでもないか。

「いや、だって……そんなこと言ったらヘレンが悲しむじゃないか……」

「ほう、そのヘレン嬢は悲しませたくなくてお嬢様は悲しませてよいと？ 随分勝手な考えですね、虫唾むすが走ります」

「それは……だって……ヘレンは可哀想な子だから……」

「可哀想なら何をしてよいと？ 無礼にも公爵令嬢の婚約者を奪い、その婚約を破談にしても許されると貴方はおっしゃるのですね？ その結果、国が混乱に陥ったとして何ら構わないと」

「そ、そんな悪意のある言い方しなくても……」

「悪意も何も事実ですから。ヘレン嬢は王太子殿下と筆頭公爵家のご令嬢であるお嬢様との仲を修復不可能なまでに裂きいた、これは変えられない事実です。まあヘレン嬢を傍に置き続けた王太子殿下にも非はありますけどね。その結果、廃嫡になるのは致し方ない当然のことではありませんか？」

「う……だ、だが、ミシェル嬢は今まで何も言わなかつたじゃないか……。どうして今更になつてヘレンのことを気にしだすんだ……」

それは私が前世の記憶を思い出したからよ。それに、思い出す前の優しいミシェルはヘレンについて何も思わなかつたわけじゃない。健気にもいつか王太子が自分の方を見ってくれる、と信じていたの。十代の少女ならそういう希望を持つたって仕方ないわ。前世アラフォーの私はそんな時間の

無駄はしない主義だからすっぱり切ったのよ。

「お嬢様のお考えをわたくしが代弁する権利はございません。それに『今まで大丈夫だったから、今後も大丈夫だろう』というのは大いなる失敗のもとだとわたくしは思います。事業しかり、政策しかり、そういう怠慢が原因で取り返しがつかないほどの失態を犯して失脚した為政者は多くおりますね。不敬を承知で申し上げますが、貴方の主人もそうなのではありませんか？」

セバス、正論すぎて相手のライフはもうゼロだわ！

全く以てその通りだわ。ミシエルが何にも言わないからって、婚約者の目の前で浮気した事実に変えられないもの。それを勝手に『大丈夫』と判断したからこういう取り返しのつかない結果になるのよ。

「だ、だがっ！ 殿下も反省なさっている！」

「はあ、左様ですか。それで？」

「は？ それでとは？」

「反省した、だけでは事態は改善しないとお分かりですよ？ 状況をどのように改善するか、今後どうしていくかが大切なのでは？ 反省してそこで終わりでは意味がないとわたくしは思いますね」

「う……そ、それは……」

あの王太子のことだ、反省しても行動を改善するかまでは全く考えていない。  
むしろあの鳥頭ではしばらくしたらまた同じことを繰り返すだろう。

「イアン公子が側近の座をなくされるのはどうしようもないとして、ヘレン嬢にしましてはお好きになさればよろしいのでは？ 王宮侍女といえども平民の女一人、公爵家であればどうにでもできるでしょう？」

「そ、それはそうだが……。両親は反対するだろうし……」

「まあそうでしょうね。王族と筆頭公爵家の縁組を壊した疫病神を家に取り込みたい奇特な貴族などおりませんからな。ですが、イアン公子がヘレン嬢を求めるということはそういうことです。周囲から蔑んだ目で見られようが、社交界で誰にも相手にされなかつたが、気にせずに生きねばなりませんよ」

うわ、想像以上に茨の道だわ……。貴族にとつて社交界で爪はじきにあうのは死んだも同然よね。  
あのお坊ちゃんにそんな覚悟はあるかしら……

「そ、そこまでなのか……？」

覚悟してなかった！ それどころか想像すらしてなかったの？ アンタのヘレンに対する愛って薄っぺらいわね!?

「そこまでいいですか、このくらい序の口でしょうね。社交界で誰にも相手にされないということとは、情報が入ってこないということです。そうなればもう……公爵家は衰退の一途を辿っていくでしょうね」

覚悟なんて一つもしていなかった当て馬ボジション男——カール・イアンは顔面蒼白となり小刻みに震えだす。頭弱すぎでしょうアンタ……

「……用事を思い出したのでこれで失礼する」

「はい、お気をつけてお帰りください」

分かり易く落胆した様子で馬車に乗った当て馬ボジション男、カール・イアン。セバスにやり込められ、やっと自分が置かれている現状の危機に気づいたようだ。

「お嬢様、あの人何しに來たんでしょうか？」

馬車が門の外に出たことを確認するとキャシーがそう聞いてきた。

うん、言いたいことは分かるわ。

「感情の赴くままに勢いで来ちゃったんでしょうよ。そういう人だもの」

「うわ……あの馬鹿殿下にはびったりですけど、王太子の側近がそれってヤバくないですか？」

「初めはまともな側近もいたのよ？ でもそういう方はヘレンについて殿下に忠告なさるでしょう？ それが嫌でまともな方は全てクビにしてしまつてね……。あのカール・イアンのようにうるさく言わずに放つておいてくれる人じゃないと務まらないのよ」

「それ、側近の意味なくないですか？」

キャシーの言う通りだ。主人の過ちを諫めるのも側近としての重要な役目。

それを放棄しているカール・イアンは側近としてまるで役に立たない存在だろう。

物語ではキザな台詞を連発してヒロインの心をときめかせただけで、第三者目線だと無責任で礼儀知らず、おまけに役立たずな男としか見えない。物語では魅力的な男として書かれていても、

現実には当てはめると真逆になるから不思議だ。

「殿下が廃嫡されるって言うていましたけど、そうなると次の王太子は誰になるんですかね？ 確か殿下は陛下の一人息子でしたよね？」

「おそらく、王弟のルノール大公にその座が移るでしょうね」

ルノール大公殿下は真面目で聡明な御方だ。何より物語には出てこない人物なので、ヘレンに惹かれる心配はないと思う。既婚者だし。それでも惹かれたら……もうこの国は終わりではないわ。

## 陛下の依頼

「は？ 近々来訪される帝国の皇太子殿下をもてなす宴<sup>うたげ</sup>をわたくしに取り仕切ってほしいと？ ……お断りますわ。もう王家とは何の関わりもないわたくしが何故やらなくてはなりませんの？」

未だに王太子との婚約が解消にならないことに憤慨したお父様が陛下に直談判しに王宮に向かい、帰ってきたと思っただけいきなり何の話だろう。意味が分からない。

「ミシエルの言うことは尤<sup>もつと</sup>もだ。私も陛下からこの話を聞いた時には憤慨して持っていた杖をその場でへし折ったさ」

そんなに怒ったのに何で私にこの話を持ってきたの、パパ？

それと杖を折るなんて、案外力強いのね？

「だがなあ……我が国ではこういった宴の采配をするのは妃か、もしくは王太子の婚約者と決まっておる。そうなるに悔しいことに今の段階で妥当なのがミシエルしかないんだ。まだ婚約が解消されていないし、名目上はお前が婚約者のままだ」

「はあ？ 王妃様がやればよろしいではありませんか？ 派手好きで趣味が悪いから宴の内容は『うわあ』なものでしょうけど、一応形にはなるんだからそれでいいじゃありませんか」

茶会でも夜会でも成金<sup>なかせん</sup>のような催しばかりやっては社交界<sup>しやうかい</sup>の重鎮<sup>じゆうしん</sup>に白い目で見られている王妃。今回もそれでいいじゃないの、王妃様が悪く言われればいいんだわ！

「それがなあ……王妃様は離宮で療養中<sup>りやうやうちゆう</sup>でな、とてもじゃないが起き上がることもできない状態だ。宴の主催など無理だろうよ」

「はあっ!? 療養中？ ご病気にでもなったのですか？」

ムカつくほど元気で嫌味満載な女が病気？

病魔すら避けて通りそうなほど根性悪のあの王妃が？

「結論から言うと、陛下が王妃に毒を飲ませた」

「結論がそれ!? 何がどうしてそうなったんですか？」

「王太子殿下がお前を蔑ろにしてヘレンとかいう小娘<sup>ちやうあひ</sup>を寵愛<sup>ちやうあい</sup>していたろう？ しかも王宮で堂々とあれを画策したのも、陛下に話が伝わらないよう使用人を買収して黙らせたのも全部王妃なんだよ。それを知った陛下が激怒なさってなあ……。王妃を離宮に押し込めたというわけだ」

あらやだ過激!? 陛下ったら大人しい小父さんな外見をしているのに中身は過激！

いきなり毒を飲ませると思わなかった!!

そういえば、物語でも王妃はヘレンを気に入ってお助けキャラみたいになっていたわ。

でも現実でそれやったらマズイって分からなかったのかな？

まあ、お花畑王太子を産んだ女だけあって頭悪そうだったしなあ……

まだ嫁じゃないミシエルに対して嫌な姑ムーブをかましていたし。

「それなら大公妃殿下はどうなのですか？ 大公殿下は後に立太子される予定ですし、そうなれば妃殿下は王太子妃になられますし……」

「それは私も提案したんだがな……実は大公妃殿下、妊娠なさっている。それでどうも悪阻がひどく起き上がれない状態にあるらしい。大公殿下が立太子なさるとして、そうなるか妃殿下の腹には未来の王が入っていることになる。それがこの宴で無理して流れたなんてことになったら……お前だって後味悪いだろう？」

「それは確かに……。そうでなくとも妊婦に無理はさせたくありませんね」

「その場には大公殿下もいてな、それはもう深く謝罪されたよ。この話のことも、アレクセイ殿下がお前を蔑ろにしたこともな。臣下である私に頭を下げおった。王族が臣下に頭を下げる重要性がお前にも分かるだろう？」

「それは……はい」

王族が臣下に頭を下げるなど本来はあり得ないことだ。

それでも下げたということは、それだけ妻である大公妃殿下を大切に想っているからだろう。羨ましい、その気概があつた馬鹿殿下に少しでもあればよかったのに。アイツ結局謝ってないし。

「ですがもう殿下の声すら聞きたくありませんし、顔も見たくありませんわ……。会えば扇子で顔を殴ってしまうかもしれません……」

「大丈夫だ、それなら問題ない」

パパ、何が問題ないと言うの？ 王族の顔面を殴ったら不敬罪で処罰されるじゃない？

「陛下は宴が終わるまではミシエルが王太子に何をしても一切不問にするとおっしゃった。しかもそれをきちんと書面にしたため玉璽まで押したので何も問題ない」

「え!？」

「しかもその書類は三部作成し、王家と我が家、そして教会にも提出済みだ。後で誰がごねようがこれで全く問題ない。更には宴の期間は大公殿下も王宮に滞在し、お前の補佐と王太子に会わせないように尽力してくださいさるそうだと。そして宴が終われば直ちにとお前と王太子殿下の婚約を破棄し、殿下の廃嫡手続きを進めるそうだと」

「外堀から埋められています!? そこまでされたら断れないじゃありませんか!」

「いいじゃないか、お前だってあの阿呆殿下の阿呆面を一発二発、殴ってやりたいだろう？ あちらから話しかけてきたら鉄扇でぶん殴ってやればいいんだよ」

「ええ、まあ……そういうことなら……」

正直、あのムカツク顔を張り倒してやりたいとは思っていた。

国王公認なら喜んで決り込むように打ってやりたい。

「なら早速明日から王宮に行ってくれるか？ 我が家の騎士団連れて構わぬからな」  
パパ、我が家の騎士団の人数がどれくらいだと思ってるのさ？

一個師団連れて王宮に行くなんて、クーデターでも起こすかと勘違いされちゃうよ？  
「お気持ちだけ受け取っておきますわ……。数名の護衛騎士で充分ですよ」

「うむ。では選りすぐりの猛者を連れていくとよい。気迫だけで他者を圧倒出来るような者をな!」